

「1部 2章 日本の姿をとらえよう」の授業案

神奈川県 公立中学校教諭

2章の流れとねらいをつかむ

指導計画を立てるとき、「章」全体を見通した流れとねらいをつかみ、授業内容に合わせた評価の観点を考えることが大切である。

1. 世界のなかで日本はどこにある？
2. 日本の範囲はどこまで？
3. 日本の都道府県を知ろう
4. いろいろな特色で都道府県をとらえよう
5. 日本はどのような地域に分けられる？
6. 日本の略地図をかこう

2章の単元構成と流れを理解したうえで、ねらいを下記のように設定した。

1. 世界的な視野からみた日本の位置を、多面的・多角的に考察する。 (思考)
2. 日本の領域を緯度・経度や地名からとらえる。 (資料・知識)
日本の領域の特色や問題点を考える。 (思考)
3. 都道府県名と都道府県庁所在地の都市名を、既習の知識から関心を広げ、日本全体のイメージをつかむ。 (関心)
4. 都道府県名と都道府県庁所在地の都市名と、地方区分による地方名を、その位置とともに知識として定着させる。 (知識)
5. いろいろな地域区分の方法を知り、その多様性を考える。 (思考・知識)

6. 日本のだまかな形状や緯度・経度、大陸との位置関係をおさえた略地図がかけられるようになる。 (思考・資料)

1. 日本の位置をとらえる

いろいろな世界地図を用意したい。

- ・「日本がまんなかにある世界地図」
- ・「ヨーロッパがまんなかにある世界地図」
- ・「アメリカがまんなかにある世界地図」
- ・「南半球が上にある世界地図」

の4つを用意する。

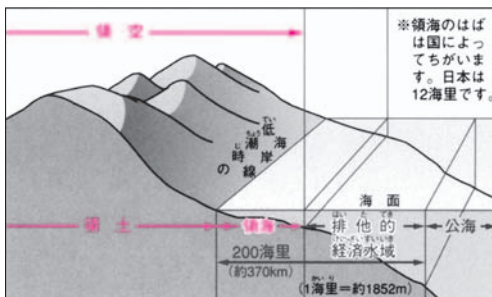
最初に、見慣れた「日本がまんなかにある世界地図」を提示して、生徒に「日本はどこですか」となげかける。生徒から「まんなかにある」という反応があるだろう。この段階では、日本中心の世界観でしかない。

そこで、そのほかの世界地図を順に提示して日本を見つけさせる。生徒から「地図が間違えている」「日本がない」などの反応が予想される。そこから「日本がまんなかではない」ことに気づき、世界的な視野から日本を見ることができるようになるのである。次に、「日本の位置をどのように説明したらよいでしょうか」となげかけ、大陸との位置関係や緯度・経度、外国から見た位置など多面的・多角的な考察を行わせていくのである。



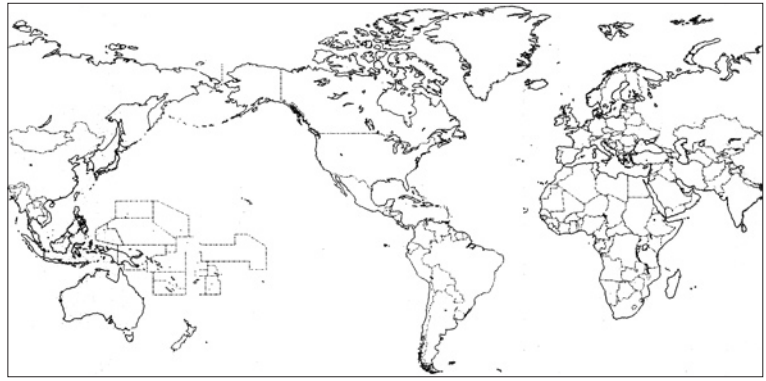
2. 日本の範囲をとらえる

「1. 世界のなかで日本はどこにある？」で認識した「日本」とは、北海道・本州・四国・九州の四島である。そこで日本の範囲を調べるためにまず、国境線がどのような線で書かれているのかを確認する。次に、ビジュアルプレゼンターを使って南西諸島を鹿児島県側から少しずつ投影し、与那国島と台湾の間に国境があることに気づかせ、そこが日本の西端であることを知る。その後、日本の周囲にかかっている国境線に注目して、プリント（日本の領域と周辺国が入った地図）に日本の範囲を記入させる。作業中に生徒が「北海道の北側・東側に国境線が二つある」ことに気づくだろう。ここで作業を中断し「北方領土」について説明しよう。現在韓国との間で問題になっている「竹島」や尖閣諸島にもふれておきたい。次に生徒がプリントで囲った範囲がすべて日本であるのかを「領土・領海・領空の模式図」を使って考えさせる。



領土・領海・領空の模式図（『中学生の地理 初訂版』p.30）

排他的経済水域の意味を理解させ、たとえ人が住むことのできない島であっても、周囲の水産・海底資源を利用する権利をわが国にもたらしめていることに気づかせたい。



アメリカがまんなかにある世界地図

3. 都道府県と都道府県庁所在地の名称と位置をつかませる。

1章で登場する地理的な用語は、作業で用いられるため、地図や地球儀を活用する技能を意味する語句として理解されている。そのため、1章では、六大陸と三大洋、面積の広い国と狭い国（各数か国）が知識として定着すればよい（地理的な用語を、その活用方法とともに身につけるのは当然である）。

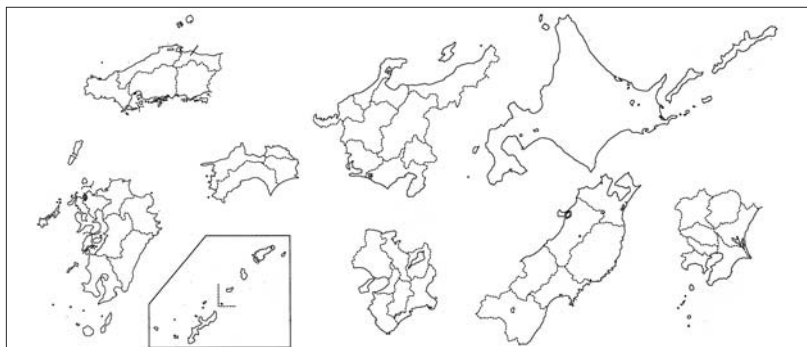
「日本の都道府県を知ろう」「いろいろな特色で都道府県をとらえよう」の單元においては、47都道府県の位置と名称、都道府県庁所在地の都市名を、これから地理的分野を学習するうえでの基礎基本として身につけておく必要がある。しかし、地図帳を広げ、白地図を配り「さあ覚えなさい」と指示しても、作業学習や、知識を増やすことに不慣れな中学1年生には、苦痛でしかない。

そこで、楽しく学習しながら自然と知識が身につく授業方法を考えなければならない。

社会科の学習における「楽しさ」を、生徒は自分の知識や技能が学習で役に立ったときに感じる。そこで、生徒の得意分野や既習知識を生かした作業学習を行うことで、47都道府県の位置と名称、都道府県庁所在地の都市名を、楽しく活動する中で身につけさせたい。

作業1 作業班を作る。

・人物 ・名所 ・祭り
・名産物 ・歴史 ・ス
ポーツ ・食べ物 など、
各自の得意分野や興味・
関心に合わせて班を作る。



作業2 都道府県を代表するものを考える。

それぞれの班のテーマに合わせて、地図上に記入していく。たとえば、「スポーツ」をテーマに選んだ班は、本拠地を置いているプロスポーツチームの名前を地図上に書いていくのである（白地図を拡大して模造紙大にしておくとい）。このとき、47都道府県すべてを記入させようとすると、生徒は行き詰まってしまう。わからない都道府県についてインターネットなどを用いて調べさせることもできるが、今回は、「わかる範囲で記入しなさい」と生徒に指示することにする（手元にある資料を使って時間内に調べてもかまわない）。このことだけでも生徒は、社会科＝新しい項目＝わからないこと＝調査学習という循環から逃れることができるのである。

作業3 地図を教室の壁に貼る。

発表会をやってもよいが、読み上げるだけでもずいぶん時間がかかるため、一人ひとりがプリント（日本地図に都道府県名が記入されたもの）を持ち、壁に貼られた地図から都道府県を代表するものを記入していく。

作業4 空白都道府県をなくす。

記入することができなかった都道府県を、クラス全体で調べ、プリントに記入する。

さあ、ここから知識の注入である。都道府県名と特徴を結びつけることはできたが、都

地方区分で分けた日本の白地図

道府県名と位置を結びつけることが難しいのである。そこで地方区分で分けた白地図を用意する（この地図は天気予報でよく目しているため、見慣れているのである）。

作業5 覚える順番を決める。

地方ごとに、出発となる都道府県（形や位置に特徴があるとよい）を決め、どのような順で都道府県を覚えていくのか決める。

作業6 都道府県名を確認しよう。

発表会のように順番に指名しながら都道府県名を答えさせる。ここでも楽しさを持続させるため、

- ・都道府県の特徴をヒントとして使う。
- ・地方ごとに区切って答えさせる（「この県は何県ですか」ではなく、「〇〇地方にある県を一つ答えなさい」としてみよう）。
- ・覚える時間を制限し、集中させる。
- ・繰り返し行う（知識として定着させるためには反復練習が必要である。地域区分や略地図をかく学習と並行して行うことで効果があがってくる）。

学習スキルも大切であるが、知識が広がる楽しさを知ることは、今後の学習の興味・関心につながってくるのである。